

〈研究主題〉

小学校外国語科の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
～6年生 Unit3 “I want to go to Italy.” の授業を通して～

南種子町立南種子中学校 教諭 大堀 聖典

目次

1	はじめに	2
2	研究主題	2
3	研究主題設定の理由	2
4	研究仮説及び手立てと構想	3
	(1) 研究仮説及び手立て	
	(2) 研究の構想	
	(3) 単元の計画	
5	研究の実際	5
	(1) 研究仮説1（主体的な学び）	
	(2) 研究仮説2（対話的な学び）	
	(3) 研究仮説3（横断的な指導）	
6	研究の成果と課題	10
	(1) 研究仮説1（主体的な学び）について	
	(2) 研究仮説2（対話的な学び）について	
	(3) 研究仮説3（横断的な指導）について	
7	おわりに	10

【参考文献・参考HP】

- | | |
|---|-------|
| ○『小学校学習指導要領解説 総則編』文部科学省 | 平成29年 |
| ○『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』文部科学省 | 平成29年 |
| ○『中学校学習指導要領解説 総則編』文部科学省 | 平成29年 |
| ○『中学校学習指導要領解説 外国語編』文部科学省 | 平成29年 |
| ○『NEW HORIZON Elementary English Course 5, 6』東京書籍 | 令和2年 |
| ○『南種子町が進める小・中一貫教育』南種子町教育委員会 | 令和4年 |

1 はじめに

南種子町では、平成 30 年度から町内の小学校外国語科・外国語活動を指導する外国語専科教員（以下 SET 加配）が配置されている。3 年前に南種子中学校に着任し、SET 加配として町内全ての小学校（中平小【単式学級】、大川小、荃南小、島間小、西野小、長谷小、花峰小、平山小【複式学級】）で外国語科の指導を行っている。学校規模及び児童の実態をもとに、指導法・活動形態を模索し、各小学校の担任と日程調整等を行い、協力しながら児童の学力向上に資する授業づくりに努めている。

2 研究主題

小学校外国語科の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
～6年生 Unit3 “I want to go to Italy.” の授業を通して～

3 研究主題設定の理由

情報化やグローバル社会、生産年齢人口の減少、外国人労働者の増加等、社会の変化に伴い、社会構造や雇用環境は大きく、加速度的に変化している。また、新型コロナウイルス感染症の拡大により新しい生活様式を余儀なくされ、私たちの生活は大きく変わり、今後の予測が更に困難な時代となっている。このような社会の中で、これからは、多種多様な考え方をもち他者と協働して課題を解決していくことや様々な情報を収集し、見極め、取捨選択する力が一層求められている。

そのような中で、小学校では新学習指導要領が全面実施となり、中学年に外国語活動が、高学年に外国語科が導入されて、3 年が経過した。これまでの外国語活動と比べると、教科になり、単語が増加し、内容がより高度なものとなっている。また、中央教育審議会から小学校 5・6 年生で教科担任制（外国語科・算数科・理科・保健体育科）を本格的に導入するよう答申が出され、外国語科の授業づくりがこれまで以上に大切になってくると考える。

このように、小学校では外国語教育の大きなターニングポイントを迎えている中で、外国語を通してコミュニケーション能力を図る素地や基礎となる資質・能力の育成は極めて大切である。また、新学習指導要領には主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることが重要であると記載されていることから、その実現に向けて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、各教科等の特質に応じた言語活動をどのような場面で、どのような工夫を行い取り入れるかを考え、計画的・継続的に改善・充実を図ることが必要である。

以上のことから、小学校 6 年生 Unit 3 “I want to go to Italy.” の単元において、単元構成や授業内容を練り上げ、小学校外国語科において主体的・対話的で深い学びが実現されるよう様々な取組を行い、授業改善を図れば、自分の考えを明らかにして、他者と深め合い、積極的に英語を使ってコミュニケーションを行う児童を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

4 研究の仮説及び手立てと構想

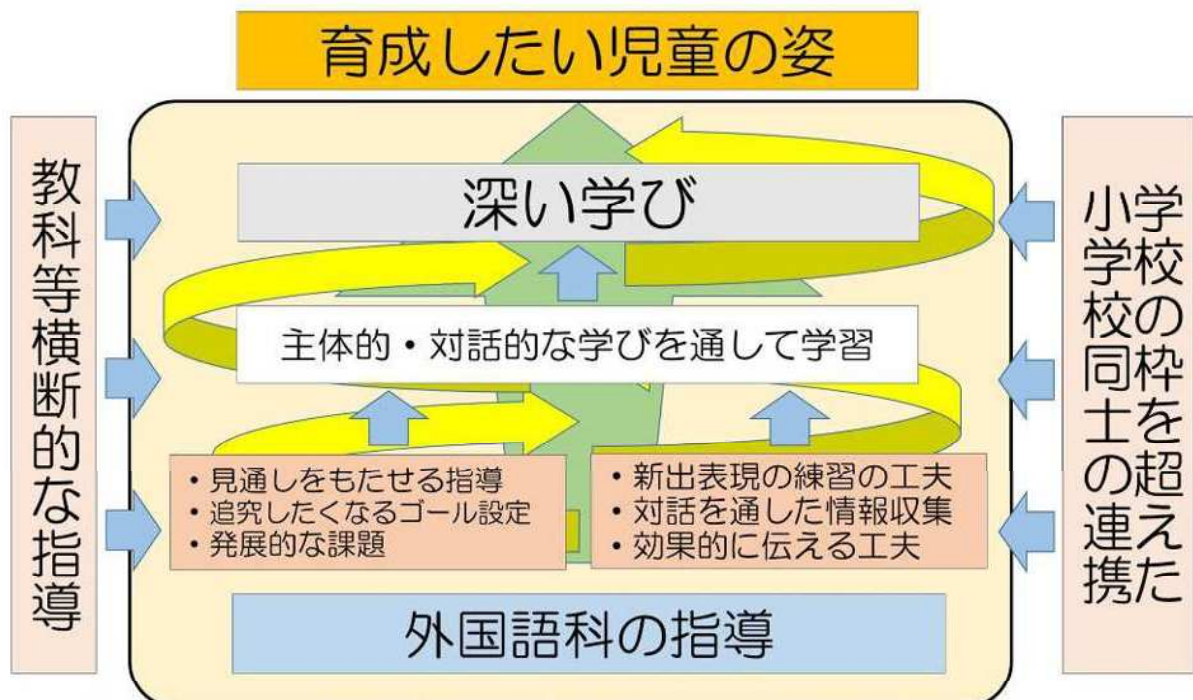
(1) 研究仮説及び手立て

<p>【研究仮説 1】(主体的な学び)</p> <p>単元の導入時に、学習の見通しをもたせ、追究したくなるゴール設定を行う。児童の実態に応じ、意図的に発展的な課題を提示すれば、主体的な学びを実現できるのではないか。</p>
<p>【手立て①】 単元の導入で見通しをもたせる指導</p> <p>【手立て②】 児童の知的好奇心を喚起させ、追究したくなるゴール設定</p> <p>【手立て③】 ICT 機器を利活用した発展的な課題</p>

<p>【研究仮説 2】(対話的な学び)</p> <p>対話を通して、自分の思いや考えを相手に伝える活動を意図的に設けたり、対話の活性化を図る手立てを講じたりすることにより、対話的な学びの質を高めることができるのではないか。</p>
<p>【手立て④】 新出表現に慣れ親しませるための工夫</p> <p>【手立て⑤】 対話を通じた情報収集</p> <p>【手立て⑥】 聞き手に効果的に伝えるための工夫</p>

<p>【研究仮説 3】(横断的な指導)</p> <p>他教科との関連を考え、教科等横断的な視点での指導を行い、自分たちが学習している内容を関連付けさせたり、小学校間の連携を図ったりすることで、学習がより発展的なものになるのではないか。</p>
<p>【手立て⑦】 教科等横断的な視点での学び(社会科)</p> <p>【手立て⑧】 ICT 機器を利活用した学校間同士の連携</p>

(2) 研究の構想



(3) 単元の計画



5 研究の実際

(1) 研究仮説 1 (主体的な学び)

ア 単元の導入で見通しをもたせる指導

単元の学習に見通しをもたせるために、単元の第1時で単元構成や学習する内容のスライドを使って順に説明し、児童に単元の概要を把握させることにより、自分たちがこれから行う学習活動に意味付けを行った(図1)。また、具体的にどのような学習を行うのかということを実際の活動を具体的に提示することで、単元の概要をより明確に把握させ、活動に前向きに取り組めるように指導した。



図1 単元指導の概要

イ 児童の知的好奇心を喚起させ、追究したくなるゴール設定

本単元は、自分の行ってみたい海外の国について英語で紹介する表現を学習し、単元の最終時には英語を使って発表するという構成になっている。

そこで、児童が追究したくなるゴールとして、自分たちが実際に行きたい国について、有名なものや観光地、食べ物、お土産等をインターネットで調べ学習を行い、スライドを作成し、順序立てて英語で発表させる活動を取り入れることにした(図2)。児童は、自分たちが紹介したい国を相手(聞き手)に伝えるということもあり、より意欲的に授業に参加できているようだった。



図2 児童が実際に作ったスライド例

ウ ICT機器を利活用した発展的な課題

前述したように、単元末の活動で自分たちが行きたい国について発表を行うが、その次の発展的な課題としてタブレット端末を活用した非同期のコミュニケーション活動を取り入れることにした(写真1)。対面でのコミュニケーションでは、相手の表情や動きを間近に見ることができ、円滑に意思疎通を行うことができるが、オンライン且つ非同期になると聞き手に伝えたい内容や意図を、より汲み取りやすく意識した表現活動や意思疎通を図らなければならない。

そこで、単元末の発表とは異なり、場面に合わせたコミュニケーションに必要なスキル(ジェスチャーや説明を付け加える英語など)を使う場面を意図的に作り出し、即興的に必要なものを考えさせ、実践的に指導した(図3)。



写真1 動画をを使った非同期交流のための撮影様子



図3 コミュニケーションでのスキル例

(2) 研究仮説2 (対話的な学び)

ア 新出表現に慣れ親しませるための工夫

新出表現や新出語句を学習する機会が多くなったため、新出表現等を練習する際は、プレゼンテーションソフトを活用して、テンポよく発音や表現練習を行うことにした。また、表現を練習した後は、より実践的な表現練習ができるよう、その表現の使い方や場面を示したスライドを用意し、反復練習を行わせることにした(図4)。そして、そのスライドは、児童にとって視覚的に理解しやすいように作成した。そうすることで、次時の授業で復習を行う際は、スライドで復習を行うことができ、時間短縮が図られ、児童の活動時間を増やすことができると考えた。



図4 単元の新出表現を練習する際のスライドと使う場面や表現練習スライドの一例

イ 対話を通じた情報収集

児童同士で新出表現を使ったコミュニケーション活動を行わせる際は、タブレット端末ロイロノートを活用した。データを配布し、それを参考に、記載されている情報を基にした活動を行うことにした。児童の取得した情報は、一人一人異なるようにし、相手と対話をしなければ、情報が得られないように工夫した。そうすることで、必然的に新出表現を使用し、相手とコミュニケーション活動を行う場面をつくり、情報収集を通してより対話的な活動になるのではないかと考えた。データは、英語だけでなく、実際の国旗やその国の有名な場所や食べ物の写真や新出表現のイラストを用いることで視覚的に分かりやすくなるよう工夫した。(図5)。資料を提示しながら新出表現を使い、コミュニケーション活動を行うことで、より高度な会話表現に取り組ませることができた(写真2)。

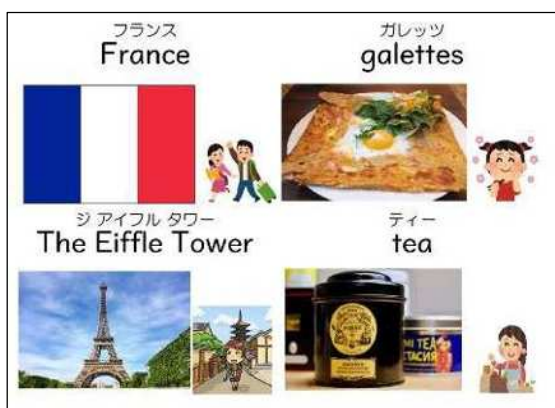


図5 コミュニケーション活動でのカード例



写真2 カードを用いて実践的な会話を行う様子

ウ 聞き手に効果的に伝えるための工夫

英語でコミュニケーションを円滑に行うために必要なものとして、つなぎ言葉や相槌がある。相手に自分の反応を伝えるリアクションワードを作成し、本単位では一貫して指導を行った(図6)。児童に分かりやすいよう、その時間でたくさん使ってほしい表現をいくつかに絞り、それらを黒板に掲示してコミュニケーション活動をする前に指導した。児童が活動を行っている際は、児童の様子を細かく観察し、児童や学級全体によくできている点を伝えた。また、改善が必要な点は教師が途中で形成的評価を行い、助言をした。そうすることで、その後のコミュニケーション活動がより活発に、充実したものになった(写真3)。



図6 コミュニケーションを活発にするフレーズ



写真3 児童に助言する様子

(3) 研究仮説 3 (横断的な指導)

ア 教科等横断的な視点での学び (社会科)

本単元では、教科書の内容に、海外の世界遺産やその数について学習する内容がある。

そこで、海外だけでなく、我が国の世界遺産や海外の世界遺産との違いについて指導を行った。また、タブレット端末を活用し、我が国の世界遺産がどのようなものが挙げられるか、自分たちで調べた国の有名な食べ物、習慣や文化について調べてグループで話し合いをさせた。その際に、日本では当たり前の行為や習慣が、海外ではマナー違反となることやその国が大切にしているものなどについて話した。そして、遺産は世界遺産といった形あるものだけではなく、私たちの身近にある和食 (日本食) が無形文化遺産に登録されていることなど、社会科や日常生活と関連付けて指導を行った (図 7)。



図 7 調べ学習のワークシート一部と教科書での指導内容

イ 小学校間の連携

南種子町では 8 校の小学校があり、外国語専科として町内全ての学校で指導している。その指導形態と ICT 機器を利活用し、町内の児童が外国語の授業を通して交流が図られるように授業展開を行っている。

具体的には、自分の紹介したい国についてタブレット端末で発表動画を撮影し、それを教師が管理しているサイトに投稿することで、QR コードを作成することができる (図 8)。それらを他の児童が読み取ることで、その発表を見ることができるようシステムづくりを行った (写真 4)。



図 8 QR コードを添付したワークシート



写真 4 他校の児童の発表を聞き取る様子

また、その発表を見て、内容の聞き取りをさせるだけでなく、その内容に対して自分の言葉を付け加えて、動画で返信をし、やり取りを行う学習を展開した。返信内容については、発表を聞いてどのように思ったかを考えさせて、適切なリアクションができるように指導し、返信用の撮影を行い、他校の児童の発表の良い点を書かせた（図9、写真5）。



動画投稿(相手の動画にリアクション!)	
	I want to go to ○○, too.
	I want to <u>eat</u> / <u>see</u> / <u>buy</u> -.
	Your <u>English</u> is <u>good</u> / <u>nice</u> . smile/ voice great
	Thank you! / Bye! / See you!

他の児童の発表を聞いてよかったこと、次に自分が気をつけること、リアクションもしてみようか書いてみよう。



**I want to go to America, too.
I want to eat hamburger.
Your English is good. See you!**

図9 返信のリアクションの例

写真5 他校の児童の内容聞き取りと返信

さらに、他校の動画を見る児童の割振は南種子町教育委員会が学期に1回主催する交流学習（町内小学校が集い、同学年と一緒に学習する会）にて、同じグループになった児童同士が聞けるようにワークシートを工夫している。そうすることで、他校の児童との交流が生まれ、より強い絆に発展し、来年度の中学校入学時に同級生を知っている状態で中学校生活が始まるため、中1ギャップの解消に資すると考えている（図10）。また、極小規模校でのコミュニケーション活動を活性化させる手立てとして有効であった。

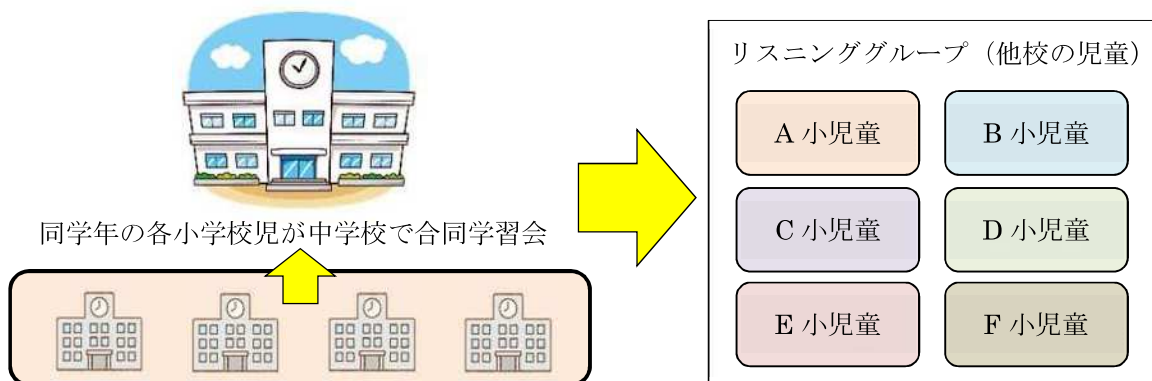


図10 交流学習のグループ編成を生かしたコミュニケーション活動

6 研究の成果と課題（○は成果、●は課題）

(1) 研究仮説1（主体的な学び）について

- 年度当初と学期末に英語の授業が好きかという項目に対して4件法でアンケートによる調査を行った（120人の児童対象。4が英語の授業が好きである。1が英語の授業が好きではない）。結果は、年度当初は平均3.02（最頻値3）であったのに対し、学期末では3.55（最頻値4）で上昇している。また、「外国語の授業が楽しみ」、「友達と英語で会話するのが楽しみ」というコメントがあり、主体的に学ぼうという姿が見受けられた。
- 単元のゴールを明確にすることで次に何を学習するか、その活動にどのような意味があるのかを考えさせ、学習に取り組ませ、指導することができた。
- タブレット端末の操作説明に時間を割く場面があったため、使う頻度を増やし、操作に慣れさせたい。

(2) 研究仮説2（対話的な学び）について

- 前回の学習の振り返りを、プレゼンテーションソフトを活用したことにより、短時間で復習が可能で、児童の活動時間を十分に確保することができた。
- 単元を通してリアクションワードを徹底して指導し、形成的評価を行うことで、コミュニケーションを効果的にするポイントを意識して活動することができた。
- ペアで練習する際に、カードにイラストや実際の写真が記載されており、実践的な場面が生まれ、積極的にコミュニケーション活動に取り組む児童の姿が見受けられた。
- 会話練習の際に、フレーズへの慣れ親しみが足りず、コミュニケーション活動がうまく行えないため、日本語を使ってしまう児童が数人いたため、適宜指導を行った。

(3) 研究仮説3（横断的な指導）について

- 他教科と関連付けることで、既習事項を想起させて指導を行うことができた。
- 他校の児童に発表を聞かせるという相手意識をもたせることで、児童は発表がどのようにすればよりよくなるか、自分たちで試行錯誤をしながら発表の練り上げを行い、録画することができていた。
- 極少人数の学校では、コミュニケーション活動を活性化させる取組の一つとして有効的であった。
- 町内すべての小学校で授業の進み具合をそろえる必要がある。また、指導者が同じであるからこそできるシステムである。

7 おわりに

各小学校で指導を行い、児童や小学校の様子を把握することができた。小学校に中学校教員が専科授業に関わることができるのは、学校の受け入れ態勢や担任の先生の学級経営、給食センターの協力など多くの方々の支えがあつてのことだということを忘れずに、次年度は個別最適な学びを意識した小学校外国語科指導に更に尽力したい。